

キャリア発達社会的能力尺度 (SEL-8Career 尺度) の作成

Development of Social and Emotional Learning of Eight Abilities for Career Development Scale (SEL-8Career Scale)

小 泉 令 三

Reizo KOIZUMI

教職実践ユニット

(令和2年9月30日受付, 令和2年12月10日受理)

キャリア発達社会的能力尺度 (Social and Emotional Learning of Eight Abilities for Career Development Scale: SEL-8Career 尺度) は, 高校生および若年就業希望者等を対象に, キャリア発達面における社会的能力を測定するための自己評定式尺度である。本研究では, 「キャリア発達のための社会性と情動の学習」 (Social and Emotional Learning of Eight Abilities for Career Development) プログラム (小泉, 2018) の8つの社会的能力概念にもとづいて尺度を作成し, その妥当性と信頼性を確認した。また, 進路多様校 (高等学校2校) の生徒を対象にこの尺度を実施したところ, 1年から3年になるにつれて合計の得点が上昇する傾向と, 女子が男子よりも高得点となる傾向が見られた。

キーワード: 社会性と情動の学習, キャリア発達, 高校生, 若年就業希望者, 尺度作成

本研究の目的は, キャリア発達社会的能力尺度 (Social and Emotional Learning of Eight Abilities for Career Development Scale: 以下 SEL-8Career 尺度) を作成し, その妥当性と信頼性を確認するとともに, 高校3年間の自己評価の様相を性差を考慮して横断的に検討することである。

わが国において「キャリア教育」という語が政策文書に初めて用いられたのは, 「初等中等教育と高等教育の接続の改善について (答申)」 (中央教育審議会, 1999) である。その後, 教育現場では中央教育審議会 (2011) などを受けて, 中学校や高等学校に限らず小学校段階からキャリア教育の推進が図られるようになった。こうした動向の背景には, 新規学卒者のフリーターすなわち定職に就かずにアルバイトなどで生計を立てる者や, 無業者の割合の増加があると考えられる。

キャリア教育は単に進学指導や就職指導を意味するのではなく, 「一人一人の社会的・職業的自

立に向け, 必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して, キャリア発達を促す教育」 (中央教育審議会, 2011) とされている。そこで育成を図るのは基礎的・汎用的能力とされ, これは表1に示す4つの能力で構成されている。

小泉 (2018) は, 特に学校から社会・職業への移行期にあたる青年期の若者を対象にして, このキャリア発達を促進するために, 社会性と情動の学習 (social and emotional learning) によるアプローチを提案している。具体的には「キャリア発達のための社会性と情動の学習」 (Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Career Development: 以下, SEL-8Career とする) という名称のプログラムで, 8つの社会的能力の育成を図ることを目的としたものである。8つの社会的能力とは, [F1] 自己への気づき, [F2] 他者への気づき, [F3] 自己のコントロール, [F4] 対人関係, [F5] 責任ある意思決定, [F6] 生活上の問題防止のスキル, [F7] 人生の重要事態に対処

表1 基礎的・汎用的能力の説明

能力	説明
①人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
②自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力
③課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力
④キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力

文部科学省・国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2011）

する能力、[F8] 積極的、貢献的な奉仕活動である。最初の5つが[T1] 基礎的社会的能力、残りの3つが[T2] 応用的社会的能力と区分されている。この8つの社会的能力の説明と、先に述べたキャリア発達を促すための基礎的・汎用的能力との関係を表2にまとめている。なお、表2の最下段の[F8] 積極的、貢献的な奉仕活動は、他者のニーズや要求の認知に始まり、自分の奉仕活動能力の自己査定、声掛けなどの働きかけ、そして援助行動の開始といったように多数の要素からなる複合的なものであるが、基礎的・汎用的能力の中では、①人間関係形成・社会形成能力と②自己理解・自己管理能力に関係すると考えられる。ここで、8つの社会的能力の構造は、小中学生用の Social and Emotional Learning of Eight Abilities at School (SEL-8S) プログラム（小泉・山田、2011a, 2011b）と一貫性を有している。

本研究は、高校生等を対象に SEL-8Career プログラムを実施する際の効果測定に用いる自己評定式尺度の作成が目的である。8つの社会的能力を測定できるようにするため、因子的妥当性の検討としては因子構造を確認する。

また、併存的妥当性として、進路選択自己効力（富永、2006）及び学校環境適応感（栗原・井上、2016）との関係を検討する。進路選択自己効力とは、進路を選択・決定するにあたって必要な行動に対する自分の可能性の認知を意味するが、これは[F7] 人生の重要事態に対処する能力と相関関係があると予想される。また、SEL-8Career 尺度

で測定する能力が社会・職業への移行期の一種のレディネスに焦点を当てていると考ええると、進路選択自己効力は SEL-8Career 尺度全体とも一定の相関関係があると予想される。また学校環境適応感では、後述するように向社会的スキルを測定する下位尺度が含まれており、これと[F4] 対人関係との相関関係が予想される。また、SEL-8Career 尺度は現在の自分を取り巻く環境との適合状態を測定している側面があるため、周囲の環境全般への適応状態を表す生活満足度とも相関関係が予想される。

信頼性の検討にあたっては、 α 係数による内部一貫性と、さらに一定期間おいて再度測定する再テスト法を用いる。

妥当性と信頼性の検討以外に、教師による生徒の社会的能力評定及び自尊心との関係も調べることにした。本研究で測定する社会的能力が学校生活での行動面とどのように関係するのか、また生徒が自らを大切な存在ととらえる自尊心との関係も、この社会性と情動の能力の育成にあたって有益な情報になると考えたためである。

方 法

調査参加者

A 県内の公立 B 高校全日制課程に在籍する 1-3 年生 290 名、公立 C 高校定時制課程に在籍する 1-3 年生 29 名、私立 D 高校全日制課程に在籍する 1-3 年生 1,254 名が調査に回答し、また B 高

表2 SEL-8Career の各能力の説明および基礎的・汎用的能力との関係（小泉，2018）

	8つの社会的 能力	SEL-8Career の各能力	基礎的・汎用的能力と SEL-8Career との関係			
			①人間関係形成・ 社会形成能力	②自己理解・自 己管理能力	③課題対応能力	④キャリアプ ランニング能 力
基礎的 社会的 能力	〔F1〕自己へ の気づき	自分の感情に気づき、また自己の能力につ いて現実的で根拠のある評価をする力		○ 自己の役割の理 解		
	〔F2〕他者へ の気づき	他者の感情を理解し、他者の立場に立つこ とができるとともに、多様な人がいること を認め、良好な関係をもつことができる力	○ 他者の個性を理 解する力、			
	〔F3〕自己の コントロール	物事を適切に処理できるように情動をコン トロールし、挫折や失敗を乗り越え、ま た妥協による一時的な満足にとどまるこ となく、目標を達成できるように一生懸命 取り組む力		○ 前向きに考える 力、自己の動機 付け、忍耐力、 自らの思考や感 情を律すること		
	〔F4〕対人関 係	周囲の人との関係において情動を効果的 に処理し、協力的で、必要ならば援助を得 られるような健全で価値のある関係を築 き、維持する力。ただし、悪い誘いは断り、 意見が衝突しても解決策を探ることがで きるようにする力	○ 他者に働きかけ る力、コミュニケ ーション・スキ ル、チームワー ク、リーダーシ ップ		△ 原因の追究、課 題発見、計画立 案、実行力	
	〔F5〕責任あ る意思決定	関連する全ての要因と、いろいろな選択肢 を選んだ場合に予想される結果を十分に 考慮し、意思決定を行う。その際に、他者 を尊重し、自己の決定については責任をも つ力		○ 主体的行動		
応用的 社会的 能力	〔F6〕生活上 の問題防止の スキル	適切なアルコール・タバコ飲用、薬物乱用 防止、病気とけがの予防、健全な家庭生活、 運動の習慣化、暴力やけんかの回避、精神 衛生の促進などに必要な力		△ ストレスマネ ジメント		
	〔F7〕人生の 重要事態に対 処する能力	就職・転職・異動などの環境移行への対処、 家族内の大きな問題（結婚や死別など）へ の対応、緊張緩和や葛藤解消、支援要請（サ ポート源を探し、アクセスする）などに関 する力		△ ストレスマネ ジメント		○ 将来設計、選 択、行動と改 善
	〔F8〕積極的、 貢献的な奉仕 活動	ボランティア精神の保持と向上、身近な人 助けと自発的関与に関する力	△	△		

（注）○は比較的強く該当しており、△は弱く該当していることを表す。また、○△の記号の下の文言は、文部科学省・国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2011）よりの抽出である。

校の教員の中で学級担任 12 名と副担任 6 名が教師による評定者として参加した。

B 高校には普通科と職業科があり、卒業後のおおよその進路は大学・短大進学者が約 1 割、専門学校等が約 3 割、就職が約 6 割といった状況であった。C 高校定時制の生徒は、在学中の実態として正規雇用が約 1 割、アルバイト等が約 5 割、無職が約 4 割といった状態であった。また D 高校には普通科と職業科があり、卒業後の進路はおおよそ大学・短大進学者が約 2 割、専門学校等が約 4 割、就職等が約 4 割といった状況であった。

調査内容

社会的能力（自己評定） 試作版 SEL-8Career 尺度を作成した。小泉（2018）が示したキャリア

発達における 8 つの社会的能力の各概念を測定するために、中学生用の SEL-8JHS 尺度Ⅱ（小泉・米山，2020）を一部参考にして内容及び表現の両面から検討を行い、40 項目（5 項目×8 因子）を作成した。特に〔T2〕応用的社会的能力である〔F6〕生活上の問題防止スキル、〔F7〕人生の重要事態に対処する能力、〔F8〕積極的、貢献的な奉仕活動の 3 つの能力については、発達段階を考慮した内容と表現にした。4～1 点で回答を求めた（はい、どちらかといえばはい、どちらかといえはいいえ、いいえ）。

進路選択自己効力 高校生のための進路選択自己効力尺度（High School Decision-Making Self-Efficacy Scale：HCDMSE）（富永，2006）を用

いた。この尺度は16項目からなる1因子構造で、4～1点で回答を求めた（自信がある、どちらかといえば自信がある、どちらかといえば自信がない、自信がない）。16項目の回答の平均値を尺度得点とした。

学校適応感 学校環境適応感尺度 ASSESS（栗原・井上, 2016）の高校生版を用いた。この尺度は、生活満足感、教師サポート、友人サポート、非侵害的関係、向社会的スキル、学習的適応の6つの下位尺度からなっており、36項目で構成されている。5～1点で回答を求めた（あてはまる、ややあてはまる、どちらともいえない、ややあてはまらない、あてはまらない）。各下位尺度に属する項目の回答を平均して、下位尺度得点とした。

社会的能力（教師評定） B高校の学級担任と副担任が独立して、生徒の社会的能力について個別の評定を行った。SEL-8Career 尺度（確定版、後述）を用いて、8つの社会的能力の該当する質問項目3問ずつを見ながら、それらを総合して生徒ごとに5～1点で評定した（当てはまる、どちらかという当てはまる、どちらともいえない、どちらかという当てはまらない、当てはまらない）。すなわち、生徒ごとに8つの評定値が2組記録された。

自尊心 自尊心尺度（Koizumi & Yamada, 2016）を使用した。この尺度は、井上（1986）をもとに作成されたもので、自己評価と教師評価の両方が高い群と、両方が低い群の間で、自己評定値の大きな開きがあった10項目が選定されている。小中学生での内的整合性は、 $\alpha=.83$ と報告されており（Koizumi & Yamada, 2016）、そのまま使用した。5～1点で回答を求めた（あてはまる、ややあてはまる、どちらともいえない、ややあてはまらない、あてはまらない）。10項目の回答の平均値を尺度得点とした。

調査時期と手続き

1回目調査は、2学期の学校生活の中心的な行事等がほとんど終了した12月初旬に、試作版SEL-8Career 尺度（40項目）をB高校とC高校で実施した。

2回目調査は、翌年2月初旬に、1回目調査の回答の分析結果にもとづいて項目を精選したSEL-8Career 尺度（26項目、確定版）と他の3つの尺度（HCDMSE, ASSESS, 自尊心尺度）および社会的能力（教師評定）を、B高校で実施した。同時にD高校でも全学年でSEL-8Career 尺度（確定版）を実施した。

調査用紙には「学校生活についてのアンケート」という表題をつけ、テストではなく回答に正誤はないことと、成績には無関係であることを明記した。学級担任が学級単位で実施し、学級担任にはできるだけ質問項目を読み上げて実施するように口頭および実施の際の手引きで依頼した。なお、調査に参加した3校では、調査結果は生徒理解の重要な資料になるとの学校長の判断と、B高校では複数の調査結果を対応づける必要から、3校すべてで生徒名の記名を求めた。ただし、回答の集計にあたっては、個人名ではなく学籍番号を用いた。以上の手続きは、福岡教育大学研究倫理委員会の承認を得たものである。

結 果

因子的妥当性の確認

以下、統計解析にはおもにIBM SPSS STATISTICS & Amos Version22を使用した。試作版SEL-8Career 尺度への回答の分析に際して欠損値のある者を取り除いた278名（B高校255名とC高校23名）のデータを用いて、探索的因子分析を行った。8因子解を想定し、質問項目を削除しながら最尤法・プロマックス回転を繰り返したところ、各因子に3項目ずつの8因子解を得ることができた（表3）。これについて、8つの潜在因子からそれぞれ該当する3項目が影響を受け、またすべての因子間に共分散が存在することを仮定した構造方程式モデリングで確認的因子分析を行った結果、モデルの適合性指標は次のようになった： $\chi^2=390.46$ ($df=224$), GFI=.900, AGFI=.866, CFI=.942, RMSEA=.052。

各因子を構成する3項目の回答の平均値を、F1～F8の各下位尺度得点とした（1.0～4.0）。この得点を用いて、8つの下位尺度と[T1]基礎的社会的能力（F1～F5の平均値）、[T2]応用的社会的能力（F6～F8の平均値）、そして[T3]全尺度得点（8つの下位尺度得点の平均値）について、相互の間の相関係数をまとめたものが表4である。[F1]自己への気づきは、他の7つの下位尺度とは相関関係が弱く、一方[F5]責任ある意思決定は多数の下位尺度と正の相関関係を示した。T1～T3は、ほとんどのF1～F7との間および相互に正の相関関係を示した。

2回目調査のB高校とD高校の生徒の回答の中で、不適切なものを除いた1,386名のデータで再度、8因子解で探索的因子分析を実施したところ、1項目を除いてすべて1回目調査と同じ因子

表3 探索的因子分析結果（最尤法，プロマックス回転， $N=278$ ）

因子および質問項目（ α 係数）	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	平均値	SD	共通性
F1 自己への気づき(.833)											
自分の得意なことと、不得意なことがわかっている。	.931								3.32	.63	.65
自分がうまくできることと、できないことがわかっている。	.795								3.32	.60	.56
自分の長所と短所がわかっている。	.619								3.16	.78	.54
F2 他者への気づき(.877)											
友だちが気分を害していると、それに気づく。		.906							3.18	.62	.63
友だちが悲しんでいると、それに気づく。		.773							3.22	.61	.68
友だちが落ち込んでいると、それに気づく。		.744							3.17	.61	.59
F3 自己のコントロール(.637)											
ムカついても、すぐにどなったりしない。			.697						3.14	.78	.37
嫌(いや)なことがあっても、八つ当たりはしない。			.619						2.87	.85	.38
気分の浮き沈みには、あまり影響されない。			.391						2.53	.89	.35
F4 対人関係(.633)											
周りの人に、自分の意見をうまく話すことができる。				1.043					2.65	.79	.51
周りの人が自分を理解してくれるように、きちんと伝えることができる。				.396					2.69	.76	.37
困ったときには、周りの人に相談できる。				.234					2.96	.81	.23
F5 責任ある意思決定(.788)											
何かを自分で決めるときには、ほかの人への影響も考える。					.948				3.03	.69	.56
何かを自分で決めるときには、軽はずみな決断(決め方)はしない。					.566				3.03	.74	.51
何かを自分で決めるときには、どういう結果になるかをよく考える。					.564				2.98	.69	.46
F6 生活上の問題防止スキル(.804)											
危険な場面には、一人で行かないようにしている。						.856			3.34	.85	.51
危険なことや やってはいけないことには、手を出さない。						.786			3.38	.70	.56
悪いことに誘われないように、なるべく関わらないようにしている。						.623			3.29	.73	.50
F7 人生の重要事態に対処する能力(.893)											
学校や職場が変わっても、うまくやっていける							.932		2.81	.81	.70
上の学校や新しい職場に行っても、うまくやっていける。							.872		2.89	.80	.71
新しい環境に入っても、うまく友だちを作れる。							.731		2.79	.79	.62
F8 積極的・貢献的な奉仕活動(.715)											
ほかの人が助けを求めていたら、できるだけ力になりたい。								.686	3.23	.61	.44
ほかの人の役に立ちたいと思う。								.635	3.13	.74	.46
ほかの人の手伝いをするのは楽しい。								.555	2.92	.76	.30
因子間相関	F2	.474									
	F3	.168	.308								
	F4	.299	.333	.265							
	F5	.438	.442	.419	.407						
	F6	.273	.221	.334	.169	.461					
	F7	.336	.357	.250	.550	.428	.131				
	F8	.364	.531	.209	.238	.576	.316	.331			

(注) 因子負荷量は、0.240以上を記載し、数値はすべて一の位の0を省いて表示してある。

因子(F1～F8)は抽出された順ではなく、説明のために並び変えてある。

パターンが得られた。この1項目とは、[F5] 責任ある意志決定下位尺度の「何かを自分で決めるときには、軽はずみな決断（決め方）はしない」で、これが[F6] 生活上の問題防止スキルにも比較的高い因子負荷量を示していた。構造方程式モデリングによる確認的因子分析では、3項目×8因子のモデルの適合性指標は次のようになった： $\chi^2=1053.46$ ($df=224$), $GFI=.939$, $AGFI=.919$, $CFI=.929$, $RMSEA=.052$ 。

併存的妥当性の検討

3項目ずつ8因子からなるSEL-8Career尺度は、虚偽尺度2項目（9. うそをついたことがない, 18. 悪口を言ったことがない）を含む26項目で構成した。項目は、F1から順に1項目ずつ配置した。B高校での2回目調査ではこれを用い、HCDMSE, ASSESSとの相関関係を表5にまとめた。分析対象者は226名であった。

進路選択自己効力を測定するHCDMSEとの相関係数を見てみると、想定通り[F7] 人生の重要事態に対処する能力との相関係数が高く、また[T3] 全尺度得点とも正の相関関係が得られた。その他、[F4] 対人関係および[T1] 基礎的社会的能力、[T2] 応用的社会的能力とも正の相関関係が見られた。

現在の学校生活との関連では、これも想定した向社会的スキルが、[F4] 対人関係および[T3] 全尺度得点と正の相関関係が得られた。その他に、いくつかの下位尺度（F2, F5, F8）および[T1] 基礎的社会的能力、[T2] 応用的社会的能力とも正の相関関係を示した。

信頼性の検討

1回目調査で得られた回答の中で、SEL-8Career尺度（確定版）に該当する24項目の因子ごとの α 係数は、表3に示したように.633～.893の間にあった。尺度全体の α 係数は.855であった。次に、2回目調査の回答をもとに得られた α 係数は、F1～F8の順に、.504, .824, .599, .702, .673, .715, .854, .760であった。尺度全体では、 $\alpha=.874$ だった。

また、B高校の生徒の中で1回目調査と2回目調査の両方に回答した生徒226名に関して、同じ24個の質問項目を照合して因子ごとの相関係数を算出したところ、F1～F8の順に、.608, .577, .583, .668, .554, .606, .708, .585（すべて $p < .01$ ）だった。

教師評定および自尊心との関係

教師評定については、まず学級担任と副担任の評定の間の相関係数を算出した。その結果、F1

～F8の順に、.432, .360, .640, .361, .500, .600, .497, .369（すべて $p < .01$ ）となっていた。各生徒について、学級担任と副担任の評定の平均値を算出し、それとSEL-8Career尺度（確定版）の間の相関係数を算出し、表5に示した。その結果、教師評定との関係は下位尺度とT1～T3のいずれとも弱い相関にとどまっていた。

自尊心尺度との相関係数を表5に示したが、あまり相関関係は認められなかった。

学年・性別の比較

2回目調査のB高校とD高校の生徒の内、不適切な回答を除く1,386名の回答をもとに、F1～F8とT1～T3について、学年・性ごとに平均値と標準偏差を算出し、学年×性の2要因分散分析を実施した。その結果を示したものが表6である。以下、多重比較はBonferroni法（ $p < .05$ ）を用いた。

[F4] 対人関係、[F5] 責任ある意思決定、[F7] 人生の重要事態に対処する能力、[T2] 応用的社会的能力、[T3] 全尺度得点では、3年が1年あるいは1・2年、もしくは2・3年が1年よりも得点が高いかその傾向を示した。

性差については、[F2] 他者への気づき、[F5] 責任ある意思決定、[F6] 生活上の問題防止スキル、[F8] 積極的・貢献的な奉仕活動、[T2] 応用的社会的能力で女子が男子より高いかその傾向を示した。逆に[F7] 人生の重要事態に対処する能力は、男子が女子よりも高得点だった。交互作用はいずれも有意ではなかった。

考 察

本研究の目的は、SEL-8Career尺度を作成してその妥当性と信頼性を確認することと、高校3年間の自己評価の様相について性差を加えて横断的に検討することであった。

妥当性と信頼性の検討

因子的妥当性に関しては、当初予定していた通り8因子の因子構造を確認することができた。回答者を増やした2回目調査では、1つの項目で複数の因子への負荷が見られたが、8因子での確認的因子分析では1回目調査同様に2回目調査でも適合性指標は満足できるレベルであった。

併存的妥当性に関しては、進路選択自己効力および学校適応感の想定した下位尺度が、SEL-8Career尺度の該当する下位尺度および合計得点と予想通りの相関関係を示していた。

信頼性に関して、内部一貫性を表すクロンバッ

表 4 SEL-8Career 尺度の下位尺度得点間等の相関係数 ($N=278$)

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	T1	T2
F1 自己への気づき										
F2 他者への気づき	.237 **									
F3 自己のコントロール	.099	.186 **								
F4 対人関係	.130 *	.329 **	.201 **							
F5 責任ある意思決定	.114 +	.442 **	.409 **	.424 **						
F6 生活上の問題防止スキル	.079	.233 **	.209 **	.115 +	.373 **					
F7 人生の重要事態に対処する能力	.242 **	.236 **	.105	.486 **	.259 **	.042				
F8 積極的・貢献的な奉仕活動	.119 +	.353 **	.164 *	.245 **	.329 **	.246 **	.208 **			
T1 基礎的社会的能力	.485 **	.666 **	.608 **	.668 **	.755 **	.316 **	.420 **	.376 **		
T2 応用的社会的能力	.235 **	.405 **	.231 **	.454 **	.472 **	.588 **	.713 **	.683 **	.564 **	
T3 全尺度得点	.432 **	.631 **	.513 **	.654 **	.721 **	.479 **	.605 **	.562 **	.927 **	.832 **

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$ 表 5 SEL-8Career 尺度と他の関連する尺度あるいはその下位尺度との相関係数 ($N=226$)

SEL-8Career 尺度	進路選択自己 効力尺度	学校環境適応感尺度					教師評定	自尊心尺度
		生活満足度	教師サポート	友人サポート	非侵害的関係	向社会的スキル		
[F1] 自己への気づき	.347 *	.230 **	.140 *	.234 **	.000	.146 *	-.042	.114 +
[F2] 他者への気づき	.410 **	.210 **	.098	.430 **	.139 *	.463 **	.031	.075
[F3] 自己のコントロール	.049	.128 +	.131 *	.054	.137 *	.229 **	.142 *	-.023
[F4] 対人関係	.512 **	.446 **	.145 *	.391 **	.153 *	.430 **	.126 +	.049
[F5] 責任ある意思決定	.352 **	.203 **	.125 +	.226 **	.203 **	.470 **	.238 **	.137 *
[F6] 生活上の問題防止スキル	.086	.181 **	.192 **	.257 **	.275 **	.240 **	.285 **	.056
[F7] 人生の重要事態に対処する能力	.488 **	.378 **	.091	.275 **	.178 **	.350 **	.230 **	.118 +
[F8] 積極的・貢献的な奉仕活動	.242 **	.182 **	.314 **	.348 **	.119 +	.547 **	.083	.217 **
[T1] 基礎的社会的能力	.521 **	.385 **	.202 **	.413 **	.200 **	.544 **	.064	.109
[T2] 応用的社会的能力	.440 **	.391 **	.282 **	.437 **	.284 **	.564 **	.156 *	.193 **
[T3] 全尺度得点	.550 **	.436 **	.263 **	.476 **	.263 **	.621 **	.108	.161 *

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$ (注) 下線の入った係数は、正の相関が予想されたところ

表6 下位尺度の学年・性ごとの尺度得点の平均値と標準偏差および分散分析結果 (N=1386)

	高校1年		高校2年		高校3年		F値[偏 η^2]		
	男子 (n=200)	女子 (n=291)	男子 (n=215)	女子 (n=284)	男子 (n=145)	女子 (n=251)	主効果(学年) (df=2/1380)	主効果(性) (df=1/1380)	交互作用 (df=2/1380)
[F1] 自己への気づき	3.293 (0.577)	3.181 (0.589)	3.260 (0.623)	3.215 (0.818)	3.299 (0.552)	3.317 (0.851)	1.373 [.002]	1.455 [.001]	0.908 [.001]
[F2] 他者への気づき	3.275 (0.594)	3.389 (0.525)	3.267 (0.554)	3.359 (0.513)	3.257 (0.594)	3.371 (0.531)	0.182 [.000]	12.481 [.009] ** 男子<女子	0.059 [.000]
[F3] 自己のコントロール	2.895 (0.621)	2.699 (0.609)	2.809 (0.650)	2.750 (0.630)	2.846 (0.685)	2.789 (0.659)	0.367 [.001]	8.712 [.006] ** 女子<男子	1.777 [.003]
[F4] 対人関係	2.703 (0.644)	2.686 (0.645)	2.763 (0.651)	2.714 (0.660)	2.826 (0.668)	2.795 (0.636)	3.324 [.005] * 1年<3年	0.786 [.001]	0.074 [.000]
[F5] 責任ある意思決定	2.867 (0.630)	2.963 (0.566)	2.995 (0.562)	3.023 (0.591)	3.011 (0.625)	3.071 (0.567)	5.488 [.008] * 1年<2・3年	3.591 [.003] + (男子<女子)	0.411 [.001]
[F6] 生活上の問題防止スキル	3.210 (0.674)	3.412 (0.517)	3.236 (0.638)	3.411 (0.557)	3.163 (0.691)	3.408 (0.573)	0.426 [.001]	39.313 [.028] ** 男子<女子	0.353 [.001]
[F7] 人生の重要事態に対処する能力	2.847 (0.787)	2.677 (0.737)	2.862 (0.719)	2.735 (0.706)	3.028 (0.684)	2.898 (0.642)	9.021 [.013] ** 1・2年<3年	12.963 [.009] ** 女子<男子	0.130 [.000]
[F8] 積極的・貢献的な奉仕活動	3.114 (0.645)	3.297 (0.545)	3.127 (0.616)	3.303 (0.544)	3.122 (0.663)	3.352 (0.558)	0.306 [.000]	36.572 [.026] ** 男子<女子	0.256 [.000]
[T1] 基礎的社会的能力	3.006 (0.447)	2.984 (0.410)	3.019 (0.432)	3.012 (0.439)	3.048 (0.446)	3.069 (0.443)	2.235 [.003]	0.014 [.000]	0.256 [.000]
[T2] 応用的社会的能力	3.057 (0.495)	3.129 (0.418)	3.075 (0.443)	3.149 (0.432)	3.104 (0.500)	3.219 (0.438)	2.532 [.004] + (1年<3年)	12.330 [.009] ** 男子<女子	0.292 [.000]
[T3] 全尺度得点	3.025 (0.431)	3.038 (0.374)	3.040 (0.402)	3.064 (0.398)	3.069 (0.439)	3.125 (0.405)	2.774 [.004] + (1年<3年)	1.909 [.001]	0.310 [.000]

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

クの α 係数は、1 回目調査では .633～.893、2 回目調査では .504～.854 となり、2 回目調査でやや低めの下位尺度があったが、尺度全体ではどちらも .85 以上であり十分なレベルであると考えられる。2 カ月間の期間を空けた再テスト法の相関係数は .554～.708 であり、これも満足できるものと判断できる。以上の結果より、SEL-8Career 尺度は妥当性と信頼性を有する尺度であると考えた。

行動面および自尊心との関係

教師評定による社会的能力とは、あまり相関関係が認められなかった。本尺度で測定している社会的能力は、学校生活における行動面には表出されない部分があるのか、あるいは日常の学校生活では評価しにくい面があるのかもしれない。

また自尊心とも顕著な相関関係が見られず、当尺度は自らを大切にしようとする感情や評価とは異なる側面を測定している可能性がある。

学生・性による違い

表6の分析結果から、あまり顕著ではないが1

年から3年になるにつれて尺度得点が上昇する傾向が見られ、また一部([F3] 自己のコントロール, [F7] 人生の重要事態に対処する能力)を除いて、女子が男子よりも得点が高くなる傾向にあることが明らかになった。

3年生は卒業後の進路決定を求められる学年であり、それに向けてキャリア発達に関わる社会性と情動の能力が向上していくのは十分予想できることである。こうした学年変化は、進路選択自己効力の研究でもキャリア未決定との関連で検討されてきているが(富永, 2008), SEL の教育効果と関連付けてさらなる検討が望まれる。性差に関しては、下位尺度によって様相が異なることが明らかになったが、中学生でも類似した結果が示されている(小泉・米山, 2020)。今後、全日制・定時制・通信制といった課程や、普通科・専門学科・総合学科といった科の区分による違いにも注目する必要があるだろう。

今後の課題

高校生および若年就業希望者等を対象に、社会性と情動の能力を育成するための SEL-8Career プログラムが提案されている（小泉，2018）。これにもとづく学習プログラムを作成して実施することによって、実際にキャリア発達のための社会性と情動の能力が向上するのかどうかを、この尺度を使用して検討する必要がある。

さらに、そうして測定された結果が、高校卒業後あるいは学習プログラム終了後の進路選択行動や社会的自立の状況をどの程度予測できるのかを確認できれば、さらに当尺度の有用性が高まる。直接的な事例ではないが、高校卒業後に正規雇用の経験がない 20～30 歳代の就職希望者の場合に、当尺度の [F7] 人生の重要事態に対処する能力の自己評価が低いという事例が報告されている（小泉，2020）。もし、高校在学中にそうした実態がアセスメントできていたのであれば、より早期に支援を開始できていた可能性もある。教育的取組や種々の支援場面での SEL-8Career 尺度の活用方法の検討が望まれる。

引用文献

- 中央教育審議会（1999）．初等中等教育と高等教育の接続の改善について（答申）
 中央教育審議会（2011）．今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）
 井上信子（1986）．児童の自尊心と失敗課題の対処との関連 教育心理学研究, 34, 10-19.
 小泉令三（2018）．キャリア発達のための社会性と情動の学習（SEL-8Career）プログラムの試案構成 福岡教育大学紀要, 67(4), 185-194.
 小泉令三（2020）．若年就業希望者のための社会的能力向上ワークショップ開発－社会性と情動

の学習プログラム「SEL-8Career」の試行－

日本キャリア教育学会第 42 回研究大会発表論文集, 44-45.

小泉令三・山田洋平（2011a）．子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 2－社会性と情動の学習 <SEL-8S> の進め方 小学校編 ミネルヴァ書房

小泉令三・山田洋平（2011b）．子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 3－社会性と情動の学習 <SEL-8S> の進め方 中学校編 ミネルヴァ書房

Koizumi, R., & Yamada, Y. (2016). Students' social and emotional competence promoting positive social relationships and skills. *International Journal of Criminology and Sociology*, 5, 105-112.

小泉令三・米山祥平（2020）．「中学生用社会性と情動の学習 8 つの能力尺度Ⅱ」（SEL-8JHS 尺度Ⅱ）の作成 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 6, 1-10.

栗原慎二・井上 弥（編著）（2016）．アセス（学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト）の使い方・活かし方 改訂第 4 版 ほんの森出版

文部科学省・国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2011）．キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書

富永美佐子（2006）．高校生のための進路選択自己効力尺度の作成－内容的妥当性・併存的妥当性の検討から 東北大学大学院教育学研究科年報, 54, 355-376.

富永美佐子（2008）．進路選択自己効力に関する研究の現状と課題 キャリア教育研究, 25, 97-111.

